高村光太郎全集

第十三巻

高村光太郎全集

第十三卷

筑摩書房版

高村光太郎全集第十三卷

昭和三十三年五月十日　發行

百圓

著者　高村光太郎

發行者　古田晃

印刷者　山田一雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所　筑摩書房

電話　東京(29)七六五一(代表)

振替　東京一六五七六八

印刷　株式會社　精興社

製本　牧製本株式會社

目次

日記

昭和二五年（一九五〇）

一二月三一日……三

昭和二六年（一九五一）

一月一日～一二月三一日……五

昭和二七年（一九五二）

一月一日～一二月三一日……八九

昭和二八年（一九五三）

一月一日～一二月三一日……一六九

昭和二九年（一九五四）

一月一日～一二月三一日……二四九

昭和三〇年（一九五五）
一月一日～一二月三一日……三三
昭和三一年（一九五六）
一月一日～三月三〇日……三九七
通信事項
昭和二四年（一九四九）
一月一日～一二月三一日……四一五
昭和二五年（一九五〇）
一月一日～一二月三一日……四七九
農事メモ……五四三
後記

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

高村光太郎全集　第十三巻

昭和二五年（一九五〇）

十二月三十一日　日　天氣

胸から脇腹へかけての赤はれとぶつぶつは寄生蟲か、腫物か、丹毒類か不明、わるくもならず、よくもならず、になり次第花卷にゆきて院長さんに見てもらふつもり、ともかく三年前かひたるサルゾールをつづけてのむ

昭和二六年（一九五一）

一月一日　月

寒さ烈し、雪まだふつてゐる、風はやみたり、　ひる頃までねてゐる、　雑煮　阿部さんよりの餅、豚、白菜、　サルゾール五粒、　午后學校よりスキーにて富澤先生郵便物持參、スキーでなくては歩けさうもなし、婦人之友正月號など届く。　ひるまよりコタツ。〇下3度、　夜飯炊、生干、のり、

一月二日　火

晴れたれど又くもり、終日雪ちらちら。寒。　朝弘さん粟もち持參、雪ふかき由、明日花巻よりペニシリンを買つてきてくれる由につき 2000 圓渡し。　雪かき、　午后忠也さん屋根の雪をおろしてくれる。夕方になる、村長さん宛テガミを托す。　夜又雪、風も少し出る。　婦人之友の原稿の事。　サルゾール。

一月三日　水

晴れ、後くもりがち、夜風出る、　朝久保田長子さん、湯口農場專務さん他一女性來訪、リンゴをもらふ、就寢中、ねてゐて話す、　ひる起床、　食後弘さんペニシリン四箱買つてきてくれる、リンゴ進呈、一錠十萬單位。　富澤先生スキーで郵便物持參、　村長さん、淺沼校長さん同道にて夕方來訪、アトリエの記事につき釋明あり、改めて斷る。　夜郵便物整理、　ペニシリン4時間おきにのむ　〈二時ねる〉

一月四日　木

晴、西風つよく寒さきびし、　午前忠也さんかけさげと便所の屋根の雪をおろしてくれる、コンニヤク、油あげをもらふ。　午后弘さん立寄る。煉乳(原)をたのみ、1000渡す。　夕方便　テガミ書、　夜「山の人々」八枚はかり書きかける。十二時又ペニシリン、　一時ねる。〈午后ペニシリンをのむ、〉

一月五日　金

くもり、風あり、時々雪ふる、寒さつよし。氷結。　ねてゐるうち忠也さん小豆餅持參。　十二時おきる。　午后便　原稿カき、　夕方弘さん練乳7個タバコ等買つてきてくれる。小豆餅進呈、　練乳をとかす。　夜「山の人々」全部で16枚ほど書き終る。　二時にねる、　ペニシリンはやめる

一月六日　土

くもり、時々雪、風あり、寒さ烈し、氷結、　終日來訪者なし。「山の人々」清書、夜書き終り、包裝、　二時ねる、

MEMO

胸の皮膚病らしきもの、まだそのままになつてゐる、

一月七日　日

晴れがち、くもり、寒、凍結、　朝、村の少女二三人余を慰めるとてくる、まだねてゐるのでかへる、　午后弘さん立ちよる、サンマ持參、拂、尙明日花卷より婦人之友へ速達便をたのみ、托す。　富澤先生スキーで郵便物持參。　ひるま風なし、夜冷える。　夜郵便物整理。

一月八日　月

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

朝晴　午后雪、稍溫　ねてゐうちち(原)黒澤尻より齋藤充司氏他4人の小學教師遊びにくる、豚鍋をつくりて食事。ジン酒一本もらふ。皆「典型」持參。署名。　夕方弘さん肉を買つてきてくれる、原稿も速達せし由。拂。　夜早くねる、

一月九日　火

くもり時々雪ちらつく、寒、　十二時おきる、　午后讀みもの、　午后弘さん郵便物を屆けに來る、日本酒らんまん五合はかり進呈、「らんまん」はどうも癖があつて余には不向。　夜郵便物整理、　十二時前にねる、

一月十日　水

うすぐもり、寒氣つよし、　ねてゐるうち藤原嘉藤治氏來訪、水澤よりのかへりみちの由、揮毫の事らし、　次いて久慈の學校長堀籠文之進氏來訪、校歌の事、これはお斷り。　辭去後おき食事後水澤公民館の樋口正文氏來訪、十五日成人の日に講演にゆく事になる。吹雪の時は取止め。當日ひる頃迎へに來る由、　忠也さん郵便物持參、納豆、

一月十一日　木

くもり、寒、　ねてゐるうち弘さん立よる、すぐかへる、　ひるおきる。　夕方便　忠也さん配給とりにゆく由、1000圓札とフクロ渡し。　夜讀書、　胸や背に溫泉素（硫黄劑）をぬつてみる、しみもせず、蟲ならば死ぬ筈。　この二三日風なし。

一月十二日　金

朝、ひるま好天氣、溫、夜雪ちらつく、　米登錄劵役場から屆く。　熊谷さん來る、院長さんの手紙持參、山鳥、菓子折、玉露等もらふ、山鳥をつくつてくれる。十五日水澤行の事を話し、十八日頃歸路參邸の旨つける、「智惠子抄その後」を奥さまに、テカミを院長にと熊谷氏に托す、　弘さん郵便物持參、　夜山鳥をにてくふ。　胸はカブレらし。手

當。　下に一枚もめんシャツを着る。

一月十三日　土

くもり、雪ちらつく。寒くなる。　朝淺沼校長來らる、水澤公民館より村役場に電話で十五日に馬ぞりをたのみ來りし由。わけを話し、馬ぞりは斷る。　テカミ書。　たえ子さん來る、イワシ3尾もらふ。券を渡して米登錄方たのむ。水澤行の事を話す。　夜讀書。　胸手當。　夜食山鳥、　ひるイワシ。　シャツを全部とりかへる。まだ感覺去らず、カブレか蟲か分明せず、レジノールを塗つてみる。カユミ幾分かるくなる。　十五日頃も雪らしく見える。　明日は支度の事。

一月十四日　日

寒、凍結つよし、風あり、朝晴、午后くもり、雪ちらつく、　ねてゐるうち村の少女院長さんのテカミ持參、水澤から早くかへつて來訪せよとの事。　ひげそり、洗髮、明日の支度いろいろ。　村長夫人來る、濕布用にとて酒の殘り少々持ちゆかる、空かん、空びん等も共に、　夜早くねることにする。　胸いくぶんよけれどまだ感覺あり。

一月十五日　月

雪やみ晴れる。朝極寒、　樋口文正[正文]氏青年一人と迎へに來る、一緒に水澤行。文化ホールにて成人の日の講演（夜になる）後料亭にて座談會、　公民館長さん自宅に宿泊　夜二時になる、

一月十六日　火

晴、　ひる頃水澤より花卷溫泉松雲閣別館にゆき、一泊、　ゆつくり入浴、　〈便下痢氣味〉

一月十七日　水

朝花卷溫泉より花卷に出る、　午后院長さん宅につく。　後宮澤家にゆきて夕方まで談話、　◎胸の症狀は肋間神經痛と分る、（吹出物も帶狀吹出物といふ由、）　（銀行に立よる）

一月十八日　木

ひるまでねる、　午后花卷町をあるき、買物等、夕方かへる、　院長さん宅にて入浴、　阿部博にあふ、色紙を渡す、

一月十九日　金

朝おそし、　澤田伊四郎氏來訪、中食、夜食を共にし、夜まで談話、智惠子抄の事、隨筆集の事。　院長さんにあはず、肋間神經痛まだ治らず、　（30,000 圓もらふ）　〈便下痢氣味〉

一月二十日　土

ひるすぎ出かける。　ゴム長12文をさがせどなし、リュツクの小型をかふ。足いたく不愉快。やぶやにて（すきやき）少々たべ、ハイヤーでかへる。　夕方食、　藥をのみ又、ビタミン注射をしてもらふ。此日工合あし。此日が此頃にて一番氣分あしき日なりき、　（此時期下痢もあり、甚だしく疲勞し居れり、息ぎれもつよかりき）

一月二十一日　日

大村次信氏夫妻及服飾學院生徒 15,6 人ほど來訪　院長さん宅洋間にて談話。ひる頃まで、　後二階にて宮澤老、佐藤昌老、院長さんと四人そばくひ。三時過解散、　夜セキ出る、　〈連日晴れる。〉

一月二十二日　月

晴、　朝茶の間にて院長さんにあふ、　身體の調子なほる、　ひるすぎ、出かける。　おろしやといふ店にてゴム長12文を見つけ買ふ。やぶにてビール、藥をかひてかへる、　原稿少々、　夜茶の間にて九時過まで談話、　〈B注射〉

一月二十三日　火

院長さん宅を十二時頃出かけ、熊谷さんのダトサンにて花卷驛、見送りくれる、　2時頃發車、大澤着三時頃、前に宿泊せし室に通さる、　入浴。野天風呂も見せてもらふ、よけれど階段はげしくて息ぎれす。　便

一月二十四日　水

昨夜もせき出る、　晴風なし、　昨夕肉鍋、　朝十時頃までねてゐる、　玉子と茶とみかんで朝食、　午后便少々下痢やむ、　施すべき方もなく神經痛　ただじつとしてゐる。　アルコホル類をのまず

一月二十五日　木

雪ふつてゐる、　鉛滯在中の木村直祐氏來訪、夕方まで談話、　今日は割に食慾あり、朝牛乳1合玉子2、茶、みかん、ひる米飯二杯のり茶。夜もいろいろの副食物をくひたり。　夜はやはりセキ出る、〈便〉

一月二十六日　金

雪ふつてゐる、　肋間神經痛は同樣なり、　今日は食慾すすまず、朝牛乳一合玉子2、茶みかん、ひる豚汁のスープのみ3杯。　ソボリン1錠食後にのむ。　夜食鯛茶、いり玉子等、　夜中に便あり

一月二十七日　土

雪ふつてゐる、午后幾分あかるくなる。　まだ神經痛減退せず。辛子療法を思ひつけど、今、やりやうなし。山にいつ

てからにする。　ひるまタバコのんだせいか夜セキ多く出る。　土曜夜は客人幾分多きよりなり。　夜食うまく食ふ。

一月二十八日　日

雪ふつてゐる、うす日もさす、　まだ息切がつよし、これを直すため入浴をひかえんかと思ふ。　ひるすぎ便順調、原稿を書いてゐる。　食事は追々うまくなる、　舌苔はまだとれず。　夜やはりセキ出る、セキつづくと出血す、チミツシンはきくやうなり。　夜入浴せず、醉つた人多きため

一月二十九日　月

天氣よし。溫。　朝いつも牛乳玉子2、茶、みかん。　原稿をつつける、　ひるのり茶、みそ汁、その他。　ひる過き便　原稿終り、清書、丁度 10 枚になる、「婦人之友」宛のもの。　夜食ウドンかけさしみ、はらご等、中〻うまくくふ。　千葉專務、夜挨拶にくる。千葉氏よりマムシ粉一かんもらふ。のむ。

一月三十日　火

上々の天氣、溫、　窓をあけて溪流を見る、　まだセキ出る、又息切れもやまず、　「婦人之友社」宛「山の春」10 枚大澤溫泉局より速達で出してもらふ。　食事すすむ、　夜ウドンかけ。

一月三十一日　水

朝晴、午后くもり、小雪ちらつく、寒、　昨夜半便あり　舌苔少くなる、　コタツにてあたたまり居り、　午后下の湯の方にいつてみる、階段多く息切す。　食事はすすむ、　空氣の方は十分と思ふ。　二日に山に歸るつもり。

二月一日　木

雪ふる、　花卷まで出て藥なと買つてかへる、まだ歩くと疲れる、　下痢便あり

二月二日　金

朝會計をすまし、山にゆかんとせしがリュツクが重すぎるので花卷驛にゆき、伊藤屋にて中食、ハイヤーをたのみて院長さん宅に來る。二三日又滯在のつもり。〈朝便〉〈朝急に便意を催し、大澤驛の便所にて下痢便〉

二月三日　土

午后雪もやう、　午前清六さん來訪、　午后中央公論松下英麿氏來訪、夕方ちかくまで談話、選集の事、　入浴。〈ひる便〉

二月四日　日

晴れ、風寒し　ひる便血便あり　終日二階のコタツにて讀書、　二ツ堰よりいつでも馬橇を仕立てる由。　豆まき、

二月五日　月

晴れる、　午前出かけて銀行に 10,000 預ける。　新潮社より文庫詩集印税 48,000 圓屆いてゐる。　大津屋さんにウコン金巾をたのむ。壽デパートにてワイシャツを買つてかへる。　秀子さんの夫君來る、〈夜血便かなり〉

二月六日　火

晴、　院長さん宅洋間にて集合寫眞をとる、　揮毫2、　舊元日、　好晴、　町にゆき茶百匁明治屋にて菓子一折かふ、小學校の先生のため、外にアツプルパイ、　夜便出血少々

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.